
俺は猫

携帯談話

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は猫

【Nコード】

N7012Q

【作者名】

携帯談話

【あらすじ】

現代人が一回死んで、猫に転生するお話。

読んでばっかの駄目作者が何を思ったのか突然書き始めたものです。超駄文ですが、読んでいただけたら幸いです。

なお作者がこの小説のジャンルがわからないという残念な状況なのでお手数ですが教えていただければ幸いです。

一話目（前書き）

初めまして、携帯電話と申します。

駄目作者の記念？すべき第一話です。短いです。マジ短いです。駄文です。マジ駄文です。それでもよければどうぞ。いらんください。

一話目

俺は一度人間として生きた。そして死んだ。何、そんなビツクな人生じゃなかったさ、普通に生きて普通に歳を喰って普通に死んだ。だからまさか人間として死んだ後、猫になってもう一度生きるなんて想像もしてなかった。

「あつ、いた、おーいミケー」

しかも、平安時代のそれなりの生活をしている農村の野良猫の元だ。

なんで平安時代かってわかるかって？そんなの当然さ、この前来た商人の人が後白河上皇がうんぬんかんぬんって言ってたからさ。

「ちよつとー聞いているのーミケー？」

さっきから話しかけてきているのはこの村で俺のせわをしてくれている農民の娘で名前は鈴、んでもって俺にミケという素晴らし名前を付けてくれた子だ。

とりあえずさっきから話しかけてきているので少し相手をしておこうと思う。毛が三色だからという理由でミケ、というとてもなく安直な名前をつける娘でも恩人なのだから。

「どうした？」

「うん。なんかね、お父さんがそろそろご飯だよって」

「わかった。そろそろいくよ」

「うん！」

なんとこの鈴という娘、俺の言うことは（猫語？）を理解できてしまうのだ。別にどちらかが、例えば俺が人語を、鈴が猫を話せる訳でわないので、俺が鈴以外の人間と話すことも、鈴が俺以外のほかの猫と話すこともできないし、どうやらほかの人間には、もちろん鈴の家族にも俺の話す言葉は理解できないらしい。まあ細かいことは置いていまは鈴の家族が用意してくれたご飯にありつきに行こう。

一話目（後書き）

はい！！短いですね！！駄文ですね！！作者のダメダメ感がある
れ出ています！！

えーっすいませんでした

感想、意見、ダメだし等ございましたら、お手数ですが感想欄
にてよろしくお願いいたします。

一話目〜予定〜(前書き)

更新が遅いですね、すみません。またまた短いですが、どうぞ

二話目〜予定〜

俺は今、鈴の家に来ている。鈴の家族は父親の友作と、母親の花さんと、弟の耕作、妹のミエで構成されている。ちなみに俺は今鈴の隣で花さんの作ったご飯を食べている。今の時代、まあ平安時代だが、この時代に猫専用のキャットフードのようなものがあるはずもなく俺は花さんの作った簡単な猫まんまをたべている。

「ミケ、ちよっとそこのお箸取ってくれるかしら？」

「にゃ〜ん（了解）」

と、いって棚の上にある箸をジャンプして置いてあった箸をとって花さんのところに持っていく。

「ありがとう」

ま、こんな感じで結構順応した生活を送っている。

ピク

俺の耳が帰ってくる友作達の足音をとらえた。俺は鈴の肩に飛び乗って父親が帰ってきたことを知らせる。

「鈴、父さん達が帰ってきてよ」

「ん、ありがとう」

.....

ここで少し俺自身の話しをしようと思う。俺は、この家族、いや鈴に救われた。俺はこの村の近くで倒れていた、いや、死にかけていたところを助けてもらった。その時、俺は鈴の力になると決めたんだ。

.....

俺が物思いにふけっている間に、鈴の父親、まあようするに友作と耕作それに続いてミエも帰ってきたみたいだ。そしたら一家がそろったということで、花さんが五人分の碗と俺がさつき取ってきた箸を並べ始める。俺は鈴のそばで丸くなってその様子をみまもる。

「そういえば、今日面白い場所を見つけたんだ明日お姉ちゃんもいく?」

唐突に妹のミエが鈴に対して聞いてきた。どうやら明日どこかに行くらしい。

「うん、とくに用事もないし、うん!行こっか!!あ、ミケも来る?」

なぜ俺にふる？まあ行くか、と聞かれて行かないのは失礼だろうし

「ああ、俺も行っていいならいき

そんなこんなでおれは明日鈴達と遠出することになった。

二話目〜予定〜(後書き)

えーまいどまいどみじかくてすいません。

作者は超短いです。ええ、いろいろと。例えば文章とか文章とか文章とか。

誤字脱字、感想、誹謗中傷、文章が短い!!、などありましたらよろしくお願いいたします。

最後に、こんな駄文で短いものをよんでいただきありがとうございます。

一週間更新、できるといいなあ……

三話目（前書き）

まうた短いです。今回は監である場所の近くに行きます。

それでは、駄文ですがどうぞ。

三話目

木々が鬱蒼と茂る森の中をけもの道を必死の進む三人と一匹の姿があつた。

その中で先頭を歩くのは肩のあたりに無雑作かかっている髪のが眼の前をちらつくのを気にしながら、先日、母親が直してくれた着物の膝にまた穴を空けないように歩く一人の少女である。二番目には、その少女より、少し背の低い、母親からもらったお弁当を落っこどさないよう四苦八苦しながら歩く五歳あたりの小さな少年である。その少年の三歩ほど後ろには、肩に猫を乗せて歩く、その三人の中で一番年上であるう少女が前の少年がお弁当を落とさないようにも守りながら、あるいている。

「姉ちゃん、まだ？」

「うん、もう少しだから」

耕作が前を歩く姉のミエに後どれくらいかを聞く。

「ほら、耕作、お弁当はお姉ちゃんが持つからもう少しなんだからがんばろ？」

鈴が耕作に自分が弁当を持つからがんばろうと促すと

「だいじょぶだい!!お姉ちゃんは後ろから黙ってついてくればいいんだよ。なあ?ミケ」

(いや、そんな事で同意を求められても困るんだが)

と、同意を求められた俺は内心こまりつつも一応同意の意をしめすために鈴の肩から頬のあたりを舐める。

「ひゃあ!!もうミケのばか!!これでもくらえ!!」

すると今度は鈴が俺を捕まえようと手を伸ばしてきたので、肩から飛び降りて前を歩くミエの頭に飛び乗る。

「うわあ!!」

ミエはいきなり頭の上に何かが乗ったので驚き声をあげるが、それがミケだとわかるとすぐに安心したのか、またしゃべりながらもミケを落とさないように気を付けながら歩きます。

「もう、いきなり飛び乗ってこないでよね。びっくりしたんだから」

「まあまあ、いいじゃんか。それよりもまだ?」

またまた耕作が後どれくらいかをきいてくる。

「ん?たぶんもうつくよ」

「ほんと!!やったー!!」

もうつくと聞いた瞬間に耕作が勢いよく走りだす。

「あ！！ほんとにしょうがないな。転ぶんじゃないよ」

「大丈夫だよ。お姉ちゃんは心配症すぎるんだよ」

「そんなことはないと思うんだけどな」

実際鈴は物凄いい心配症だ。例えば、前に耕作が転んで膝を擦り剥いた時はその傷から悪い物が入らないようにと、ほんの少しの傷に對してまるで骨折したかの様に包帯代わりの布でぐるぐる巻きにしたり、俺が近くの森に昼寝をしに行つてそのまま夜まで寝ていたときなど、夜中中ずつと俺のことを探し続けて、家に帰つたら思いつきり泣かれ、その後一週間外出禁止、さらにやつと外にでたと思つたら今度は鈴がついてくる。みたいなことが発生し、それが一週間続いた。

「あ、ついたみたいだね」

「うん、ここだよ、ここだよ」

どうやらついたらしい。やっぱり考え事していると進むのが早いらしい。何がとは言わないが。

「お姉ちゃん、姉ちゃんもはやく」

どうやらすでに耕作が弁当を広げて待っていたようだ。というか耕作は場所を知らないんじゃないのか？……何か気にしちゃいけない気がしたからそのままにしておこう。うん、そうしよう。

「早く食べようよ。もうお腹すきすぎだよ」

「んじゃ、食べますか」

「はい、ミネも食べるでしょう？」

それはもちろん。何せ花さんの作ったご飯でしょう？食べないわけがない。

「すすす」

「むにゃむにゃ」

「……………」

どつやら全員寝てしまったようだ。先ほどまで食べられていた弁当は綺麗に片づけられていて、今はそばにあった大きな大樹によりかかりながら三人仲良く寝ている。

そつえばこの樹の近くだったな。俺が鈴に助けられたのは。

三話目（後書き）

はい、なんでしょうね、この絶望感。

次回、過去編に入るかも！？

ミケの過去とは！！そして鈴との始めてあつた時の内容は！！

そうご期待あれ！！（はたして期待できる
物がどうかわかりませんが）

今回も感想等ありましたら、お願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7012q/>

俺は猫

2011年10月8日03時50分発行